



Title	友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連
Author(s)	古谷, 嘉一郎; 坂田, 桐子; 高口, 央
Citation	対人社会心理学研究. 2005, 5, p. 21-29
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/12227">https://doi.org/10.18910/12227</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連

古谷 嘉一郎(広島大学大学院生物圏科学研究科)

坂田 桐子(広島大学総合科学部)

高口 央(広島大学総合科学部)

本研究では、親密度の増大・減少によって対面と携帯メールの自己開示がどのように増大・減少するかという点と、対面とメールの自己開示がどのような過程でその後の親密度の知覚と関連を持つかという点を、友人関係を対象とした縦断的調査によって明らかにすることを目的として検討を行った。102 名を対象に分析を行った結果、親密度が高くなると、対面では将来の目標や悩み事に関する開示が増加し、携帯メールではうわさ話が増加した。一方、親密度が変化しない、もしくは下がっても、携帯メールの開示量は変化しなかった。さらにパス解析の結果から、対面での開示が行われることが前提となって、携帯メールの開示が親密度に影響していた。以上の結果は、携帯メールは、(1)相手との最低限の関係を維持し、(2)対面の開示が土台となって親密度に影響する、という可能性を示唆した。

キーワード: 友人関係、対面、携帯メール、自己開示

## 問題

本研究は親密度の変化、および対面と携帯メールの自己開示という側面から、大きく 2 点について検討を行うものである。まず、1 つ目は親密化、非親密化した場合の開示量の変容についての検討である。2 つ目は、対面と携帯メールを用いた開示の時系列的な関連の過程を検討することである。

通信白書(総務省, 2004)によると、平成 15 年度末の携帯電話・PHS の契約数は約 8,600 万件である。また、Miyata, Boase, Wellman, & Ikeda (2003)の調査によると、20 代では携帯電話所持者の 9 割弱の者が携帯メールを利用していることが示されている。つまり、携帯電話は広く普及しており、加えて 20 代所持者のほとんどが携帯メール機能を利用していることがわかる。

それでは、携帯電話の普及によって、どのような影響が対人関係におけるコミュニケーションで現れてきたのであろうか。内閣府(2002)の「IT による家族への影響実態調査」では、携帯やインターネットの利用によって、時間を気にせず友人と連絡を取れるようになった(66.3%)、他の家族を気にせず友人と連絡を取れるようになったといった結果(63.0%)が 20 代以下の層で顕著に示されている。加えて、友人との関係が密になった(52.6%)といった結果が示されている。この結果は 20 代以下の若者に限定して言えば、携帯メールやインターネットの利用が友人とのコミュニケーションを増加させ、関係を密接にするという可能性を示唆していると考えられる。一方で、動機的側面に注目した研究においても、携帯メールの利用が親和感情によって強く規定される(都築・木村, 2000)ことが指摘されている。つまり、携帯メールは不特定多数ではなく、特定の親密化したい相手との関係を親密にする道具である可能性が示唆される。

具体的な検討に注目すると、携帯メールは CMC (Computer-Mediated-Communication) の 1 つであると考えられる。CMC は、対面と比較して、非対面性、距離的・時間的な制約の解放、個別性、非言語的な手がかりが伝達されない(宮田, 1993)といった特徴を有している。加えて、大坊(2002)は、文字を主体とする間接的メディアであること、応答チャンネルが無いので、対人関係の親密さを補強する働きが乏しく、柔軟な関係を築きにくいこと、選択した他者との応答に基づいて関係が築かれるが、他の直接向き合うような事態で見られる関係の拡大や進展が少ないことを挙げている。このことから、携帯メールでのコミュニケーションは対面でのコミュニケーションと機能的に異なり、関係の進展についても対面よりも劣る可能性が考えられる。

しかし、携帯メールでのコミュニケーションはインターネット上でのコミュニケーションといった、不特定多数とのコミュニケーションが可能なものとも異なると考えられる。つまり、携帯メールで親密化を図るには、コミュニケーションを行う前提としての「アドレスの交換」ができるほどの親しさが必要である点、不特定多数に開かれた道具ではないという点で、従来の CMC とは異なる特徴を備えているといえる。しかし、携帯メール機能に限れば、非言語チャンネルが大幅に制限されている点や、時間的・物理的制約から解放(宮田, 1993)されているという点については掲示板や電子メールと同様であると考えられる。

親密度の変化による対面、携帯メールでの自己開示の変化

自己開示とは、個人的情報を他者に知らせる行為であり、相手に分かるように自分自身をあらわにする行為である(Jourard, 1961)。友人関係における親密化と自己開示が非常に密接な関係であることについては、多

くの研究から示唆が得られている(e.g., 榎本, 1997; Derlega, Metts, Petronio, & Magulis, 1993)。なかでも、自己開示と親密化に関わる議論として、Altman and Taylor (1973)の社会的浸透理論が挙げられる。この理論では、初対面の他者の場合、表面的なことしか話をしない。一方、関係が親密になる(親密化)とより内密なことを話すようになる。また、Knapp(1984)の階段モデルから、関係が疎遠(非親密化)になる場合は開示量自体が減少すると考えられる。

それでは、進展した関係において、対面と携帯メールではどのような開示の変化が起こるのであるのか。対面での自己開示を検討している Altman & Taylor(1973)の社会的浸透理論に基づくならば、基本的に対面での自己開示は親密度が高くなることで表面的な開示から内面的な開示へと移行することは明らかである。つまり、親密化することによって、内面的な開示が増加することが考えられる。また、川口・渡辺・中井(2003)は日常場面のコミュニケーションにおける伝達内容と手段についての調査を行っている。彼らの結果では、携帯メールでの開示は親密度が相対的に低い相手に対して行われ、親密度が高い相手に対しては直接話すという手法が取られていることが示されている(川口ら, 2003)。また、相談事といったパーソナル性が高い情報や儀礼的な要素を持つ情報を伝達する際には、携帯電話を用いた方法(音声伝達や携帯メール)ではなく、対面のやりとりを選択するという結果が示されている(川口ら, 2003)。このような点からも、対面での内面的な開示は親密化することで増加することが考えられる。

次に、携帯メールは、対面と比較して時間的・空間的な制約が無く、いつでも相手に対して開示を行うことが可能である。一方で、内容に着目すると、川口ら(2003)の結果から、親しい友人に対しては表面的な内容の開示が多くなる可能性が示されている。特に「ひまつぶし」といったコミュニケーションで携帯メールの選択が高

いことが分かる。加えて、内面的な開示は多くの情報量を必要とすることから、メールでのコミュニケーションでは行いづらい。以上の点を考慮すると、携帯メールでの開示は内面的、表面的な内容の両方の開示が増大するが、表面的な内容の開示が特に増加することが考えられる。

それでは、非親密化した関係における開示はどうなのであるか。階段モデル(Knapp, 1984)や社会的浸透理論(Altman & Taylor, 1973)から考えるならば、親密度が低減するために、その親密であった時点において行われていた内容の開示が減少すると考えられる。つまり、コミュニケーションのすべてが減少するわけではなく、深い内容の開示が減少すると考えられる。

一方、吉井(2001)は、友人関係を維持するために携帯メールを用いるといった結果を報告している。これは、携帯メールは疎遠になった、もしくは疎遠になると予測された関係に対して弱いつながりを保つことを可能にするツールであることを意味している。このような点が自己開示量としてどのように反映されるかは明らかでないため、本研究では探索的な検討を実施することで、非親密化した関係についての開示の様相を探る。

ここまでの議論を踏まえると以下の予測が導かれる。

- (1)親密化した場合、携帯メールでは内面的、表面的の両開示が増加するだろう。ただし特に、表面的な開示が増加するだろう。
- (2)非親密化した場合、対面では内面的な内容の開示が減少するだろう。

#### 親密度、対面の開示とメールの開示の関連

本研究では親密度に対面コミュニケーションと携帯メールでのコミュニケーションが及ぼす影響を縦断的に検討し、因果関係についての検討を行う。

具体的には、対面および携帯メールの自己開示と親密度の影響過程を明らかにする。Derlega et al.(1993)は、自己開示と関係が相互改変の過程であることを指摘している。つまり、関係の定義を行うことで、

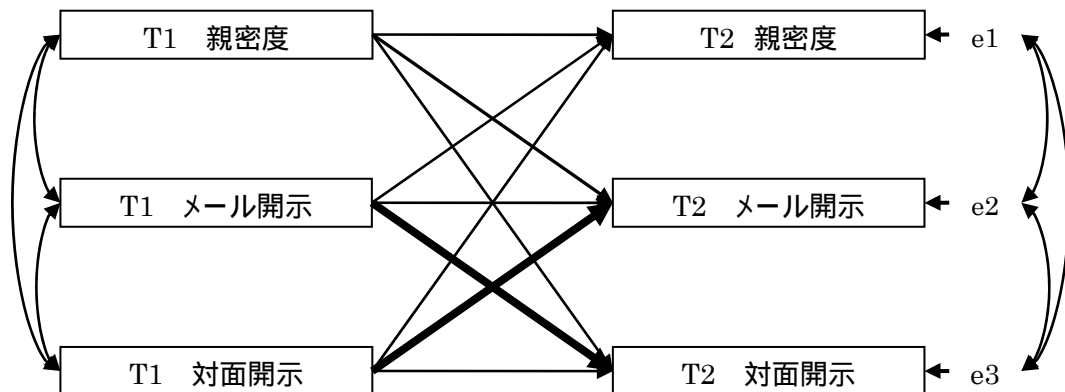


Figure 1 予測モデル

T1: Time1, T2: Time2 を示している。

その関係に応じた自己開示が行われる。そこで再び開示者と相手との関係が定義され、またその関係によって、次に交わされる開示が定義される。

ここまでの議論からまず、ある時点の親密度と開示がそれぞれ関連していることが考えられる。次に、同時系列の対面の開示とメールの開示の関連であるが、内閣府(2002)の「IT」による家族への影響実態調査」によると、「日頃よく会話をする友人」と46.7%の人が、「日頃あまり会話をしない友人」とは31.2%の人が、会話が増えたことを報告している。さらに、「時間を気にせず友人と連絡を取れるようになった(66.3%)」、「他の家族を気にせず友人と連絡を取れるようになった(63.0%)」などの結果を考慮すると、両開示の間にはある程度の相関が認められると考えられる。

また、内閣府(2002)の調査では「友人との関係が密になった(52.6%)」という結果を報告しているが、これがどのような過程を通して関係が密になるのかという点は、あまり具体的に検討がされてこなかった。そこで、本研究では対面とメールの開示の両者を考慮に入れた上で親密度に影響を与える過程を検討する。まず、自分にとって身近な友人の場合、携帯メールでの開示が行われるようになるためには、ある程度相手との関係性が形成できていることが前提になると考えられる。従って、対面の開示がある程度行われて、相手を理解できていることで、携帯メールでの開示が行われる可能性がある。つまり、初期の対面の開示が後のメールの開示に影響を与え(Figure 1 内 のパス)、最終的に後のメール開示が後の親密度と関連を持つ。一方で、携帯メールでの開示によって、後の対面の開示を増加させ(Figure 1 内 のパス)、後の対面の開示と親密度が関連を持つ過程も存在することが考えられる。こちらは、初期のメールの開示が後の対面の開示に影響を与える過程であると考えることができる。本研究ではこれらの予測を検討することによって、関係変容過程における対面と携帯メールによる自己開示の長期的な関連も確認する。

#### 親密度の変化による自己開示量の変化の予測

- (1) 親密化した場合、携帯メールでは開示が増加するだろう。特に、表面的な内容の開示が増加するだろう。
- (2) 非親密化した場合、対面では内面的な内容の開示が減少するだろう。

#### 親密度、対面開示とメールの開示の関連の予測

- (3) 初期の対面開示が後のメール開示に影響を与えるだろう。
- (4) 初期のメール開示が後の対面開示に影響を与えるだろう。

## 方 法

### 調査時期

2002年7月(第1回調査: 以下、Time1)と2002年9月(第2回調査: 以下Time2)。

### 調査対象者

看護学校1年生187名、Time1、Time2 通じての回答数は153名(男性13名、女性140名; 平均年齢20.0 ± 3.39 歳)。

### 手続き

Time1 では、「コミュニケーションに関するアンケート」として教示を行い回答してもらった。また、Time2 ではTime1 で想起した相手とのコミュニケーションについて回答してもらった。詳細は質問紙構成で述べる。

### 質問紙構成

同性友人の想起 Time1 において「ある程度メールのやりとりをしており、看護学校入学後に学校内で知合った、これから親しくなりたいと思っているが、さほどは深い話はしていない同性の相手」を1人思い浮かべてもらい、具体的にイニシャルを記入してもらった。Time2 では、各調査対象者に Time1 で想起した相手のイニシャルを貼り付けた質問紙を配布し、以下の項目に回答してもらった。

相手との親密度 “「赤の他人」を0点とし、「非常に親しい」を100点としたときに想起した相手とどれだけ親しいと思うか”と尋ね、0~100点で記入してもらった。

相手との具体的な関係 相手とはどのような関係であるか尋ね、「同じクラスの人」、「同じ寮に住んでいる人」、「他のクラスの人」、「その他」の中から当てはまるものを全て選んでもらった。

自己開示尺度(21項目) 嶋田・佐藤(1999)の自己開示尺度、榎本(1997)のESDQを参考に自己開示尺度を作成した<sup>1)</sup>。回答する際には、直接会ってコミュニケーションする場合と携帯メールでやり取りする場合について「1: 全然話していない」~「5: とても話している」の5件法で回答してもらった。後述するが、分析で用いた具体的な項目はTable1に示した通りである。

Time2 では、Time1 で記入してもらったイニシャルを貼り付けた質問紙を配布し、相手との親密度と自己開示尺度に回答してもらった。

## 結 果

### 分析対象者の選別

本研究では、携帯メールの利用と関係の変化が自己開示にどのような差異をもたらすかを検討するため、対面と携帯メール両方で相手と相互作用している人を分析対象とした。また、Time2において、Time1の相手を

想起できなかった人を分析対象から除いた。よって、分析対象者は102名(男性7名、女性95名)となった。

#### 相手との関係の特徴

相手との関係属性について分析を行ったところ、分析対象者のうち84名が同じクラスの友人を思い浮かべていた。このことから、想起した相手は物理的に身近な相手を中心となっていることが分かる。また、日常において、対面でのコミュニケーションが容易な環境であるといえる。

#### 自己開示尺度の検討

自己開示尺度の構造を検討するために Time1、Time2 の自己開示尺度について対面、携帯メールの尺度ごとに因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行

った。負荷量、項目の整合性などを考慮し、採用した具体的な項目を Table1 に示す。Table1 に示した項目の内容から、将来目標、悩み事因子は内面性の高い内容の開示と考えることができる。また、うわさ話因子は表面的内容の開示と考えることができる。さらに、自己開示尺度の信頼性について検討を行うために、Time1、Time2 それぞれで対面、携帯メールについて測定した尺度ごとに  $\alpha$  係数を算出した結果、各因子は  $\alpha s > .70$  であることが確認された。

Table 1 本研究の分析に用いる自己開示尺度の項目

将来目標	自分が興味を持っている業種についての夢 自分が興味を持っている業種についての心配 目標としている生きかた 生きがいに関すること
悩み事	異性間についての悩み事 性についての悩み事 同性の友人関係についての悩み事
うわさ話	有名人についてのよいうわさ話 有名人についての悪いうわさ話 同性についてのよいうわさ話 芸能やスポーツについての話題

Table 2. 時期と親密度の差分値が

	親密度得点に与える影響	
	Time1	Time2
差分値>0 群 (低親密 高親密群)	54.67 a	71.23 b
差分値<=0 群 (高親密 低親密群)	65.34 b	57.00 a

アルファベットが異なる値の間には有意差があることを示す。(いずれも  $p < .01$ )

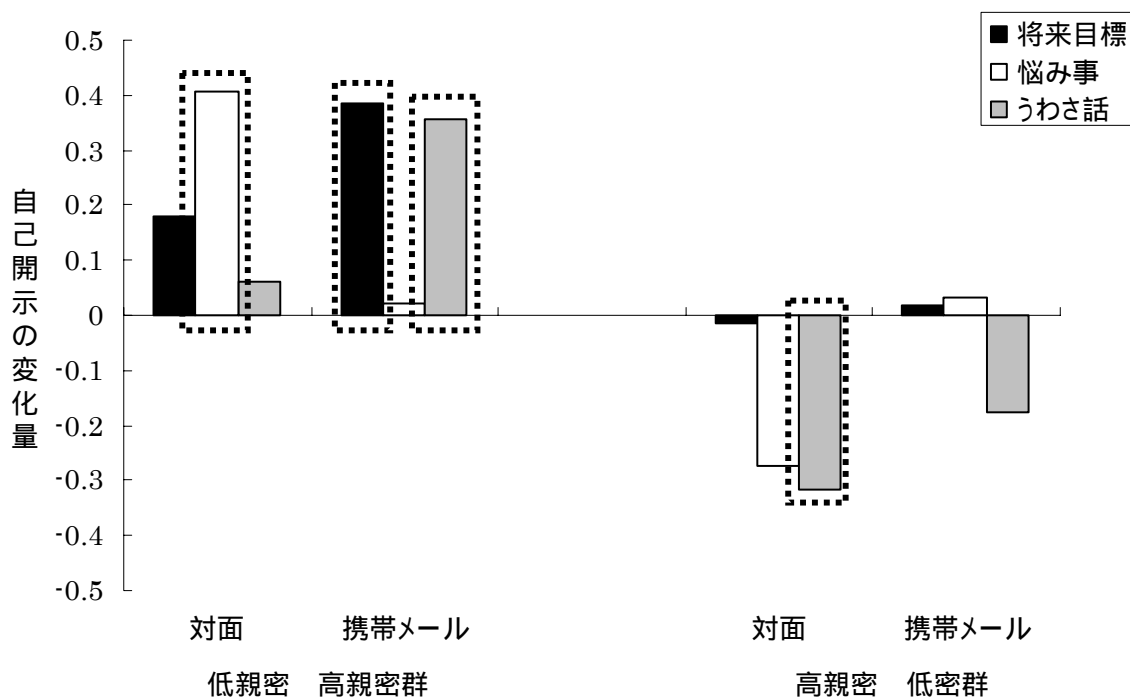


Figure 2 親密度の変化による自己開示の増減

点線に囲まれたグラフはいずれも有意な増加・減少を示している( $ps < .05$ )

## 関係の変化の検討

関係の変化を確かめるため、親密度得点の差分値 (Time2 の親密度得点 - Time1 の親密度得点) を算出した。次に、差分値 > 0 の者 52 名 (以降、親密度得点差分値 > 0 群)、差分値 ≤ 0 の者 50 名 (以降、親密度得点差分値 ≤ 0 群) として、群分けを行った<sup>2), 3)</sup>。

この群分けを、親密化群、非親密化群と定義してよいことを確認するために、従属変数を親密度得点とする、時期(2: Time1・Time2) × 親密度の差分値(2: 親密度得点差分値 > 0 群・親密度得点差分値 ≤ 0 群) の分散分析を実施したところ、時期の主効果 ( $F(1, 100) = 19.12, p < .01$ ) が認められ、Time1 ( $M = 60.01$ ) よりも Time2 ( $M = 64.12$ ) の方が、親密度得点が高いことが示された。加えて、交互作用が認められた ( $F(1, 100) = 176.35, p < .01$ ; Table 2)。

下位検定を実施した結果、Time1 においては親密度得点差分値 ≤ 0 群の方が親密度得点差分値 > 0 群よりも親密度得点が高かったが、Time2 では親密度得点差分値 > 0 群の方が親密度得点差分値 ≤ 0 群よりも親密度得点が高いことが示された。加えて、親密度得点差分値 > 0 群では Time2 の得点が Time1 の得点よりも高く、親密度得点差分値 ≤ 0 群では Time1 の得点が Time2 の得点よりも高かった。よって親密度得点差分値 > 0 群と親密度得点差分値 ≤ 0 群は、それぞれ、親密さの低い状態から高い状態へ移行した群、親密さの高い状態から低い状態へ移行した群であることが示された。

これらの点を考慮し、以降では、親密度得点差分値 > 0 群を「低親密 高親密群」とする。また、非親密化している親密度得点差分値 ≤ 0 群は「高親密 低親密群」とする。

## 親密度の変化による自己開示量の変化の検討

携帯メールの利用が関係変化による自己開示量にどのような差異をもたらすか検討するために、自己開示尺度因

子の開示差分値 (Time2 - Time1) について 0 からの  $t$  検定を行った (Figure 2)。低親密→高親密群について

は、対面では悩みごとの開示が、メールでは将来目標とうわさ話の開示が有意に増加していた ( $ps < .05$ )。つまり、親しくなることで開示量は増加しているが、その内容は対面とメールで異なることが示された。高親密→低親密群では、対面のうわさ話の開示のみが有意に減少していた ( $p < .05$ )。また、悩み事に関しても統計的には有意ではないが、変化は減少の方向であった。一方、メールの開示量には有意な変化はなかった。以上の結果から、予測 (1)、(2) と一致するものといえよう。

## 親密度、対面の開示とメールの開示の関連の検討

親密度と開示の関連を検討するため、パス解析に利用する変数の平均値、0 次相関を求めた。なお、分析対象者数が少ないため、開示は因子ごとの得点ではなく、合計得点の平均値を用いた。その結果、各変数とも弱から中程度の有意な相関が認められた (Table 3)。よって、パス解析が可能であることが示された。これらの変数を用い、パス解析を行った。

パス解析の結果を Figure 3 から Figure 5 に示した。全体を対象にした分析 (Figure 3) を見ると、Time1 の携帯メール開示が Time2 のすべての変数に影響を与えていることが分かる。Time1 の携帯メールでの自己開示を多く行うほど、Time2 における親密度が高く、携帯メールの開示も多く、また対面の開示も多く行うようになっている。加えて、Time1、Time2 それぞれの変数間に正の関連が認められている。この結果から、全体を対象にした分析から対面の開示もメールの開示も同時系列で親密度との関連が存在し、加えて予測 (4) を支持する方向であると考えられる。

次に、低親密 高親密群の結果について述べる (Figure 4)。Time1 における親密度と対面開示、メール開示と対面開示に関連が認められた。しかし、親密度とメール開示の関連は認められなかった。次に Time1 におけるメール開示から Time2 における親密度に対して直接的な影響があった。また、Time1 における親密度から Time2 における対面開示に影響が認められた。加えて、Time2 において各変数間に関連が認められた。

Table 3 パス解析で利用する各変数の記述統計量と 0 次相関

	Mean	SD						
T1 親密度	59.90	17.00						
T1 対面開示	2.48	0.75	.42 **					
T1 メール開示	1.76	0.70	.26 **	.47 **				
T2 親密度	64.25	17.34	.58 **	.29 **	.29 **			
T2 対面開示	2.50	0.77	.32 **	.50 **	.44 **	.54 **		
T2 メール開示	1.84	0.76	.29 **	.32 **	.57 **	.44 **	.62 **	

\*\* :  $p < .01$

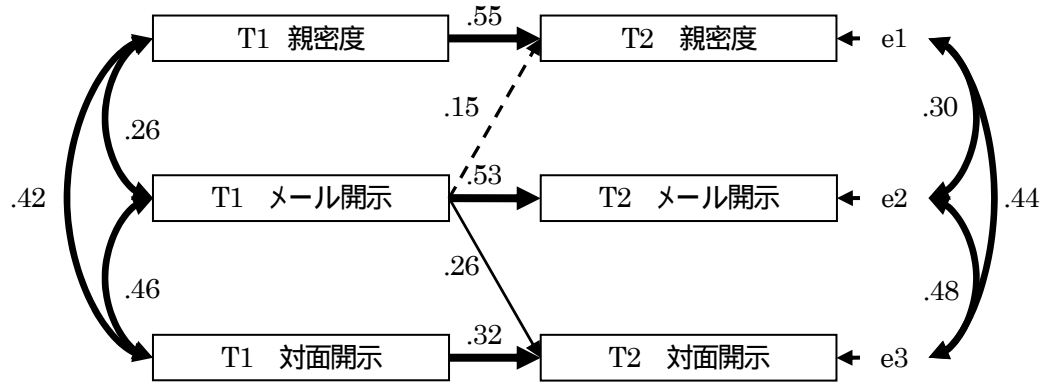


Figure 3 対面・メールの開示と親密度の関連のパス図(全体)

T1: Time1, T2: Time2 を示している。  
 点線のパスは  $p < .10$ , 細字のパスは  $p < .05$ , 太字のパスは  $p < .01$  を示している。  
 有意でないパスは削除している。

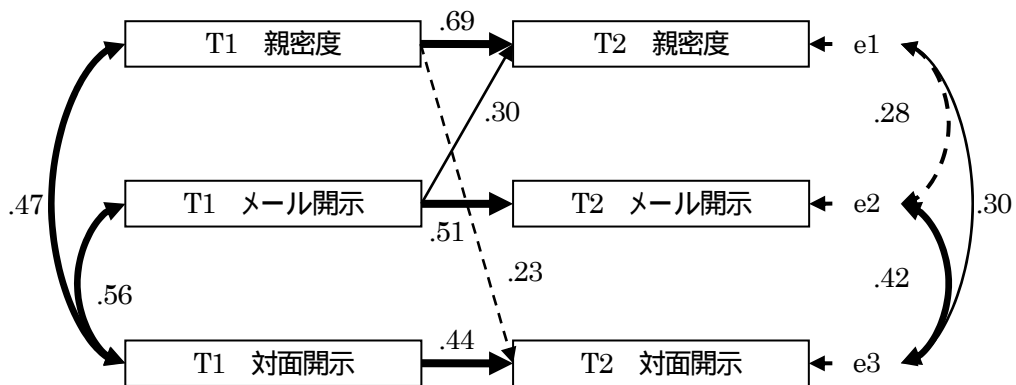


Figure 4 対面・メールの開示と親密度の関連のパス図(低親密 高親密群)

T1: Time1, T2: Time2 を示している。  
 点線のパスは  $p < .10$ , 細字のパスは  $p < .05$ , 太字のパスは  $p < .01$  を示している。  
 有意でないパスは削除している。

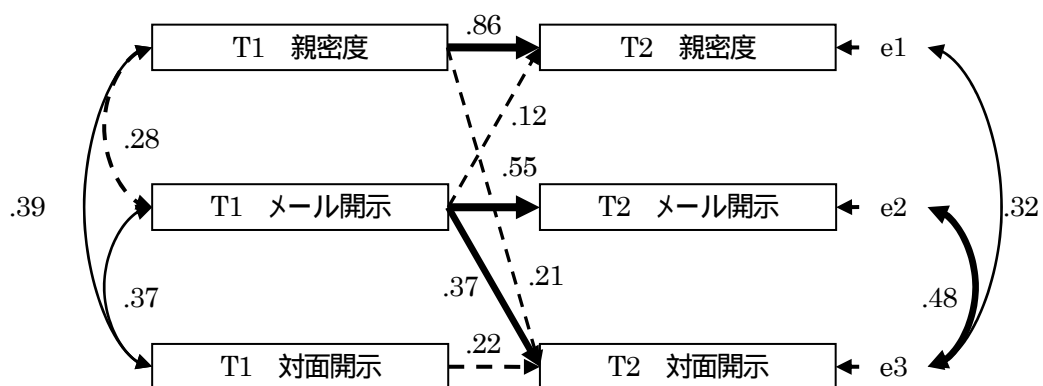


Figure 5 対面・メールの開示と親密度の関連のパス図(高親密 低親密群)

T1: Time1, T2: Time2 を示している。  
 点線のパスは  $p < .10$ , 細字のパスは  $p < .05$ , 太字のパスは  $p < .01$  を示している。  
 有意でないパスは削除している。

つまり、親密化する前の時点では親密度と開示の関連が認められなかったが、親密化した場合には同時系列上で関連が認められることが明らかになった。

最後に、高親密 低親密群の結果について述べる (Figure 5)。Time1 における変数同士の間に関連が認められた。また、Time1 のメール開示から Time2 の対面開示に影響し、傾向ではあるが親密度にも影響が認められた。この結果は予測(4)を支持する方向である。また、Time1 の親密度から Time2 の対面開示に影響の傾向が認められた。そして、Time2 における変数間の関連は親密度と対面開示、メール開示と対面開示には認められたが、メール開示と親密度には認められなかった。

## 考 察

### 親密度の変化による自己開示量の変化

関係が変化することにより、対面と携帯メールにおいて、どのような内容の開示がどのように変化するかを検討した結果、低親密→高親密群では対面で悩み事が、携帯メールで将来目標とうわさ話が増加した。つまり、対面と携帯メールで変化する開示の内容が異なることが示された。さらに、高親密→低親密群では対面のうわさ話のみが有意に減少していることが分かった。

これらの結果から、親密度が向上した場合、全ての開示が対面で増加するのではなく、悩みごとといったより内面的な側面が対面で増加するといえる。これは、社会的浸透化理論(Altman & Taylor, 1973)を支持する過程である。一方で、携帯メールの開示の場合、比較的表面的な内容の開示が増加する。つまり、内容によって、対面とメールを使い分けている可能性があるといえる。

次に、親密度が低下した場合、対面の開示はうわさ話のみが有意に減少していた。加えて、有意ではないものの、悩み事も減少している可能性が示唆された。この結果から対面では内面的、表面的の両開示が減少している可能性が示唆された。この結果も社会的浸透化理論(Altman & Taylor, 1973)を支持するものであると考えられる。一方で、携帯メールの開示は減少が認められなかった。この結果から、非対面性によって相手との緊張が減少し、返報性の義務が弱まると考えられる携帯メールでの開示は、相手との最低限のつながりを保つのに役立つ可能性を示唆しているといえる。

### 親密度、対面開示とメールの開示の関連の結果

まず分析対象者全体の結果について述べる。Time1 のメールの開示が Time2 の対面の開示に影響を与えることが明らかになり予測(4)が支持される形となった。しかし、各時点での変数間の関連の値も中程度の大き

さを示していることから、単にメールの開示だけが対面の開示を増やしたり、親密度を向上させるわけではないと考えられる。

次に低親密 高親密群と高親密 低親密群について大きく 3 点の考察を行う。まず、1 点目は低親密 高親密群での Time1 における変数間の関連と、高親密

低親密群での Time2 における変数間の関連に同様の傾向が認められたことである。両群における各時点の親密度の得点はほぼ同様であった。この点から、ある程度の親密度の場合、親密度と対面の開示が関連し、対面の開示と携帯メールの開示が関連していることになる。この結果は、親密度と携帯メールの開示は対面の開示によって仲介された関係であることを示唆するものであるといえる。つまり、対面の開示ができていることがメールの開示を行うための前提と考えられる。

2 点目は、低親密 高親密群における Time1 のメールの開示が Time2 の親密度得点に影響を与えていることである。この結果から、最低限の親密度があるときにメールの開示が親密度に影響を与えることが考えられる。また、Time1 の親密度が Time2 の対面開示に影響を与えていた。これらの結果をまとめると、結果的により親しくなった関係においては、初期の親密度が後の対面の開示に影響を与え、初期のメールの開示が後の親しさに影響を与えるという過程が明らかになった。

3 点目は、低親密 高親密群において、Time1 のメールの開示が、Time2 の親密度や対面の開示に影響を与えていたことである。この過程は予測(4)を支持する結果といえよう。しかしここでは、親密度が低下した関係においてこの結果が示されたことに注目すべきであろう。

1 点目と 2 点目を合わせて考察すると、ある程度の親密度を有する関係の場合、親密度と対面の開示の関連と、対面の開示とメールの開示の関連が存在した上で、メールの開示が多いほど親しさを上昇させる影響過程が存在すると考えられる。

一方、1 点目と 3 点目を合わせて考察すると、初期の親密度が高く、後に下がった関係の場合、親密度と各開示は関連を持つが、Time1 のメールの開示が Time2 の対面の開示と親密度に影響を与えることによって、結果的に Time2 の親密度とメール開示の関連が失われることが明らかになった。つまり、初期のメールの開示量が親しさに影響する可能性を示唆するものともいえる。

以上をまとめると、低親密度であった関係から親密度が向上する場合においても、親密度のある程度高い関係から親密度が低下する場合でも、メールの開示が重要な役割を果たすことが明らかになった。特に、低親密



度であった関係から親密度が向上する場合では、同時系列における対面の開示が土台となることで、メールの開示を促進するという仲介過程の可能性が示されたといえる。つまり、携帯メールだけでは親密化は成り立たず、対面との連携が重要であると考えられる。

#### 今後の課題

本研究では、親密度の変容によって、対面と携帯メールのどのような開示が増減するのかという側面と、対面と携帯メールの開示が親密度に影響を与える過程が明らかにされた。しかし、本研究にはいくつかの課題が残されている。まず、対象を看護学校生に絞ったことにより、日ごろの関係がクラス内だけで構築されてしまうという点である。回答者の約8割が想起した相手として、クラス内の友人を挙げていた。仮に、交友関係が多様である場合、例えば大学生で行った場合、交友関係の多様さから異なった結果が示される可能性もある。

さらに、関係変化による群分けの問題が挙げられる。本研究では、低親密 高親密群と高親密 低親密群に群分けを行い、検討を実施した。しかし、結果でも述べたように、これらの群分けは低親密から高親密へと親密化した群と、高親密から低親密へと非親密化した群であった。そのため本研究の結果は、限定的な親密化と非親密化という意味合いとなった。今後、初期の親密度が同じ程度の状態から親密化する場合や非親密化する場合についての検討が必要になる。

次に、本研究の調査対象者は女性がほとんどであった。先行研究から、女性は男性に比べ、自己開示を多く行うことが示唆されている(榎本, 1987)。そのため、男性と比較して、増加する開示パターンが異なる可能性もある。この点を明らかにするために、性別を考慮に入れた分析も必要になる。

また、今回のパス解析は調査対象者数の都合上、開示合計得点の平均値を用いたが、内容についてもさらに詳細な影響過程を検討することが重要であろう。Furutani and Sakata(2002)の結果では、メディアによって関係満足度に影響を与えるコミュニケーションの内容が異なることが示唆されている。この点から、親密化の過程においても内容を考慮した分析が必要である。

最後に、本研究では自己開示の内容に着目した検討を実施した。だが、自己開示の領域といった側面についての検討も今後必要であろう。特に、携帯メールがどのような開示領域で用いられているのかといった点は非常に興味深いと考えられる。

#### 引用文献

Altman, I., & Taylor, D. A. 1973 *Social Penetration*.

New York: Holt, Rinehart & Winston.

大坊郁夫 2002 ネットワーク・コミュニケーションにおける対人関係の特徴 対人社会心理学研究, 2, 1-15.

Derlega, V. J., Metts, S., Petronio, S., & Margulis, S. 1993 *Self-disclosure*. Newbury Park, Ca.; Sage.

榎本博明 1987 青年期(大学生)における自己開示性とその性差について 心理学研究, 58, 91-97.

榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房.

Furutani, K. & Sakata, S. 2002 Tool Communication and The Degree of Relational Satisfaction on Friend Relationships within Same Sex. *Poster presented at the 25<sup>th</sup> conference of the International Congress of Applied Psychology (July 2002, Singapore)*.

Jourard, S. M. 1961 Self-disclosure patterns in British and American college females. *Journal of Social Psychology*, 54, 315-320.

川口 潤・渡辺はま・中井雄介 2003 日常場面のコミュニケーションにおける伝達内容とコミュニケーション手段に関する調査研究 —高校生・大学生・壮年を対象として— 情報文化研究, 6, 169-196

Knapp, M. L. 1984 *Interpersonal communication and human relationships*. Boston: Allyn & Bacon

Miyata, K., Boase, J., Wellman, B., & Ikeda, K. 2003 The Mobile-izing Japanese: Connecting to the Internet by PC and Webphone in Yamanashi. [http://www.chass.utoronto.ca/~wellman/netlab/PUBLICATIONS/\\_frames.html](http://www.chass.utoronto.ca/~wellman/netlab/PUBLICATIONS/_frames.html)

宮田加久子 1993 電子メディア社会 - 新しいコミュニケーション環境の社会心理 - 誠信書房

内閣府 2002 ITによる家族への影響実態調査 (平成14年度版).

<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/2002/0405it-chousa/>

嶋田洋徳・佐藤健二 1999 自己開示尺度の作成とその健康心理学的意義 人文科学研究, 101, 17-34. 新潟大学人文科学部.

都築誉史・木村泰之 2000 メディア・コミュニケーションの心理的特性に関する分析 —対面、携帯電話、携帯メール、電子メール条件の比較— 日本心理学会第64回大会発表論文集 164.

総務省(編) 2004 情報通信白書(平成16年度版).

<http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h16/index.html>

吉井博明 2001 若者の携帯電話行動 川浦康至・松田美佐(編) 携帯電話と社会生活 現代のエスプリ, 405, pp.85-95.

#### 註

1) 島田・佐藤(1999)の自己開示尺度の因子分析結果から、負荷量の高いものを選定した。さらに選定項目内で自己開示の内容として抜けていると考えられる項目をESDQで補った。

2) 本研究ではTime2とTime1の親密度得点の差分値によって親密化・非親密化の群分けを試みた。その際に親密度得点差分値 $>0$  群と親密度得点差分値 $\leq 0$  群それぞれで分布の確認を行ったところ、親密度差分値 $>0$  群では左寄りの裾野の広い分布( $M=16.57$ ,  $Me=10$ ,

尖度 = 3.35, 歪度 = 1.20, レンジ = 5-50, 親密度得点差分値 $\leq 0$  群においては右寄りの裾野の広い分布 ( $M = -8.34$ ,  $Me = -10$ , 尖度 = 5.24, 歪度 = -1.26, レンジ = -40-0)であった。このように、偏りのある分布は以降の分析にとって望ましいことでないが、分布の幅の広さはある程度確保されている。

3) 本研究では、差分値によって群わけを行った。しかし、この方法のみでは、Time1 の親密度の高低の情報が消えてしまうことになる。そのため本来は Time1 の親密度の高

さを考慮した群わけを行った上での分析が必要であろう。例えば、Time1 の親密度の高さ(高・低) $\times$ 関係の変化(親密化・非親密化)の 4 群の設定が挙げられる。しかし、本研究は主な分析としてパス解析を実施していることから、2 群以上に分割すると分析に耐えうる数ではなくなることから親密度得点差分値 $>0$  群(低親密 $\rightarrow$ 高親密群) 親密度得点差分値 $\leq 0$  群(高親密 $\rightarrow$ 低親密群)の 2 群で分析を実施することとした。

## Correlation between intimacy and self-disclosure in Face-to-Face and Short Message Service in friendship

Kaichiro FURUTANI (*Graduate School of Biosphere Sciences, Hiroshima University*)

Kiriko SAKATA (*Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University*)

Hiroshi KOHGUCHI (*Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University*)

In this research, we considered how self-disclosure in face-to-face (FtF) and Short Message Service (SMS) increase or decrease along with increased or decreased intimacy awareness. Further, longitudinal study targeting friendship was conducted to elucidate the course of self-disclosure in FtF and SMS associating with intimacy. The result of analysis with 102 participants showed increased self-disclosure along with intimacy regarding future goals and concerns in FtF, and gossiping in SMS. On the other hand, self-disclosure in SMS was constant regardless of constant or decreased intimacy. In addition, pass analysis showed how self-disclosure in SMS affected intimacy on assumption of FtF self-disclosure. These results indicated possibilities that SMS may 1) maintain minimum relationships and 2) affect intimacy based on FtF self-disclosure.

Keywords: Friendship, Face-to-Face, Short Message Service, Self-disclosure.